

本発表では、図案家で縄文土器やアイヌ工芸の研究者・収集家でもあった杉山寿栄男(1885-1946年)を取り上げ、杉山による大正後半から昭和初期にかけての「原始文様」研究とその普及活動について報告する。杉山寿栄男という人物の総論に関しては藤沼邦彦「原始工芸・アイヌ工業の研究者としての杉山寿栄男(小伝)」(『東北歴史資料館研究紀要』23号、1997年)が詳しく、経歴や学問的業績、収集家としての側面、人柄などが遺族への聞き取りを含めて論じられている。発表者は先行研究にもとづきながらさらに考察を加え、杉山の生涯のなかでも縄文土器の研究と普及活動に焦点をあてることで、美術、考古、民俗の分野におよぶ幅広い活動を検証する一端にしたいと考える。

はじめに、図案家であった杉山が縄文土器の研究に着手する前後の経歴を述べておく。1885(明治18)年に浅草に生まれた杉山は、1909(明治42)年に東京高等工業学校工業図案科を卒業、大正期には美人画ポスターや雑誌の表紙を手がけ、おもに商業図案の分野で活躍したとされる。杉山が原画を描いた大日本麦酒や明治屋の美人画ポスターなど、残された作例の多くは当時の流行を追った図案と言えるもので、たとえば女性の前髪の描き方には三越呉服店図案部で活躍していた杉浦非水が描く女性像との関連がうかがえる。

図案稼業のかたわら仏像や雛人形の収集を趣味とした杉山は、1923(大正12)年を境に縄文土器の文様にも興味を持ちはじめ、その後『原始文様集』(1923?1924年)、『上代文様集』(1925?1926年)、『アイヌ文様』(1926年)、『日本原始工芸』(1928年)、『ヒゲベラ』(1933年)、『アイヌ芸術』(1941-1943年)など、写真と拓本を多用した図集をつぎつぎに刊行していく。縄文土器の文様研究に関しては、土器の文様を分析する際の見方に、文様の成り立ちや構成といった図案の知識をいかした点が特徴と言える。さらに1928(昭和3)年に刊行された『日本原始工芸』では、縄文土器の成形方法、胎土分析や焼成実験の結果が報告されており、そこからは杉山の関心が縄文土器の器面に施された文様に限らず、縄文土器それ自体の解明へと向かっていたことがわかる。

同時に昭和初期になると、杉山は土器や石器などの考古遺物をはじめ、アイヌや台湾の人々がもちいた生活道具を「原始文化」や「原始工芸」と銘打って、積極的にお披露目するようになる。本発表では1929(昭和4)年に京橋の高島屋で開催された「原始文化展覧会」と1933(昭和8)年に札幌・小樽・函館の今井呉服店で開催された「北海道原始文化展覧会」を例に、各展覧会における杉山の関与を指摘する。原始文化展覧会では人類の進化を説明したパノラマが設置され、北海道原始文化展覧会では縄文土器やアイヌ文様を応用した浴衣や手拭いが記念品として販売されており、いずれも百貨店を会場に学術的な内容をわかりやすく伝える公衆向けの展覧会であったという共通点が見出せる。

ところで、考古遺物やその文様を世の中に広く紹介しようという発想は、なにも杉山一人の発案によるものではなく、明治期の考古学者がすでに着目していた考えでもあった。東京帝国大学理科大学人類学教室の画工で考古学者であった大野雲外(1863-1938年)は、1895(明治28)年の段階で縄文土器の文様をあざやかに彩色した模様集をつくり、それを染物や陶器の図案に応用したいと述べている。大野が著した『模様のくら:日本石器時代の部』(1901年)や『人種紋様:先住民の部』(1915年)などの模様集は、杉山が縄文土器の文様を研究する際に影響を与えたことが推察される。大野と杉山の発想の違いを比較することで、杉山が昭和初期にかけて百貨店を会場とした展覧会で考古遺物を展示、しだいに縄文土器そのものに「原始文化」や「原始工芸」としての価値を見出すようになった点に注目したい。